

月刊

2013

10
月号

みんぱく

特集

武器を アートに



「武器をアートに」展によせて 吉田憲司
「武器の玉座」から「いのちの木」へ クリストファー・スプリング
エコ&ピース・プロジェクト 竹内よし子
アートのちから 高橋雅子
カンボジアの社会復興と伝統芸能 福岡正太
日本版武器よさらば 木下直之

アフリカの音楽と洗練

二〇世紀以降のポピュラー音楽の屋台骨を支えてきたのはアフリカの音楽だというと、意外な顔をされることが多い。アフリカの音楽と言われても、きちんと聞いたことがない、知らないという人がほとんどだからだ。しかしわれわれにもおなじみの洋楽のジャズやR&Bやサルサやサンバは、いずれも新大陸やカリブ海でヨーロッパとアフリカの音楽が会って生まれたものだ。J・ポツプの大半もそんな洋楽の影響を受けている。間接的だが、われわれはアフリカの音楽に由来するリズムの感覚をグルーブという言葉で説明し、あたりまえのように楽しんでいるのである。

もつと直接的な例もある。たとえばユーチューブでドン・オマール・フィーチャリング・DJルセンゾの「ダンサ・クドゥロ」という曲を探してみてもほしい。過去三年間で約四億六千万回という驚異的な再生数のこの曲には、アンゴラのダンス・ミュージック「クドゥロ」のリズムが使われている。

世界的に最も有名なアフリカの曲は、一九六一年にアメリカのトークンズがヒットさせた「ライオンは寝ている」だろう。ミュージカル『ライオンキング』でもおなじみのこの曲の原曲は一九三九年発表の南アフリカのポップスで「ムブーベ」と

北中 正和

プロフィール
1946年奈良市生まれ。音楽評論家。東京音楽大学講師。新聞、雑誌、インターネット、放送などで世界各地の音楽を紹介している。著書『ほんのうた』『ギターは日本の音楽をどう変えたか』(以上、平凡社)、『ロック』(講談社)、『毎日ワールド・ミュージック』(晶文社)、編・著書『事典世界音楽の本』(岩波書店)、『世界は音楽でできている』(音楽出版社)、『てるりん自伝』(みすず書房)、『細野晴臣 エンドレス・ストーリー』(平凡社)などを多数。

いう。アメリカでは「ウイモウエ」というタイトルでも知られている。民謡扱いられたこの曲の作者がソロモン・リンダであることがアメリカの法廷で認められたのは二世紀に入ってからというひどい話もあるが、ともあれ、南アフリカ特有のコーラスの音楽がいまではこの曲にちなんで「ムブーベ」と呼ばれて親しまれている。

今年のフジ・ロック・フェスティヴァルにマリ共和国のバセク・クヤーテ&ンゴニ・バというグループが出演した。アメリカに渡ってバンジョーの元になったンゴニという弦楽器を大小組み合わせて彼らは素晴らしいポップスを作り出している。ところが彼らの音楽を聞いて、素材で伝統的なアフリカの民謡は素晴らしいと思う人もいるらしい。

たしかに彼らの音楽には西洋の音楽のような和声やメロディの複雑さはないし、楽器もちがう。しかしリズムの組み合わせは西洋の音楽よりはるかに複雑で、そこには高度な文化が感じられる。従来ソロで弾かれていた伝統楽器を合奏するのも現代的でポップな行為だ。ひとつに現代化や洗練と言っても、その過程や方法はひとつではない。アフリカ音楽を楽しみながらぼくはそんなことも学んだ気がする。

月刊
みんな
10月号日次

- | | |
|--|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
アフリカの音楽と洗練
北中 正和</p> <p>2 特集
武器をアートに</p> <p>2 「武器をアートに」展によせて 吉田 憲司</p> <p>4 「武器の玉座」から「いのちの木」へ
クリストファー・スプリング</p> <p>5 エコ&ピース・プロジェクト
——日本からモザンビークの平和構築を支える 竹内 よし子</p> <p>7 アートのちから 高橋 雅子</p> <p>8 カンボジアの社会復興と伝統芸能 福岡 正太</p> <p>9 日本版武器よさらば 木下 直之</p> <p>10 似たモノさがし
武器の世界——お命頂戴つかまつる
丹羽 典生</p> <p>12 みんなく Information</p> | <p>14 地球ミュージアム紀行
大韓民国歴史博物館
朝倉 敏夫</p> <p>16 多文化をあきなう
「買ってもらう」から「売れる」フェアトレードへ
高津 玉枝</p> <p>18 フィールドで考える
太陽系外惑星の観測——ハワイ、マウナケア山
眞山 聡</p> <p>20 人間学のキーワード
イスラーム復興
藤本 透子</p> <p>21 異聞逸聞
「野球大国」ドミニカの秘密
窪田 暁</p> <p>22 制服の世界、世界の制服
ハノイの街の秩序をつくる「色」
寺戸 宏嗣</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|--|--|

特集 武器を アートに

企画展
武器をアートに——
モザンビークにおける平和構築

会期 2013年7月11日(木) —
11月5日(火)
場所 国立民族学博物館
本館企画展示場B

アフリカのモザンビークでは、内戦終結後も大量に民間に残された武器を農具などと交換して武装解除を進め、その回収した武器でアートの作品を作り出すという事業が進んでいる。その事業を通じて制作された作品が、先ごろ本館におさめられた。企画展「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」開催にあわせて、武器やアートのもつ力について考え、アートを通じて平和を築く営みを紹介する。



「肘掛椅子」(Armchair)
クリストヴァオ・カニャヴァート(ケスター)
2012年制作
国立民族学博物館所蔵
標本番号 H0274166

アートで平和を築く
南部アフリカに位置するモザンビークでは、一九七五年の独立後一九九二年まで続いた内戦の結果、戦争終結後も大量の武器が民間に残された。現在、この武器を農具と交換することで回収し、武装解除を進めるとともに、回収された武器を用いてアートの作品を生み出す

し、社会の安定化に貢献しようという、「銃を鋤に」(TAE / Transformação de Armas em Enxadas / Transforming Arms into Plowshares) というプロジェクトが進められている。

昨年、このプロジェクトの一環として、日本に住む人びとへのメッセージを込めて、「いのちの輪だち」(Cycle of Life) という作品が制作され、民博におさめられた。民博では、現在、企画展「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」を開催し、「いのちの輪だち」をはじめ、民博で収集した作品と、「銃を鋤に」のプロジェクトを支援してきた日本国内のNPO法人「えひめグローバルネットワーク」が所蔵する作品をあわせて展示し、アートを通じて平和を築く営みを紹介している。

戦争は終わったのか

「銃を鋤に」プロジェクトは、モザンビーク聖公会のデニス・セングラナーネ司教の発案で始められた。セングラナーネ司教は、一九九二年の内戦終結後、国内を広く回るうちに、ある村



回収された武器。2012年10月、モザンビークキリスト教評議会(CCM)にて

「武器をアートに」展によせて

吉田 憲司 民博文化資源研究センター

の女性から、「戦争は確かに終わった。でも、無数の武器がわたしたちの周りに残っている。いつ戦闘がまた始まってもおかしくない。どうすればいいのでしょうか」と問われたという。答えを探そうと、司教は、聖書イザヤ書に「剣を鋤に」という章句があることを思い出し、それにヒントをえて、民間に大量に残された武器を農具や自転車と交換し、武装解除を進めることに思い立ったという。プロジェクトは一九九五年から始められた。さらに、一九九七年からは、その回収した武器を分解し、それを素材にアートの作品を生み出す作業をアーティストたちと開始することになる。

平和を輸出する国へ
「銃を鋤に」プロジェクトで、武器は農具や自転車、ミシンなどと交換されるが、とくに自転車については、過去一五年間、日本の松山に本部を置くNGOえひめグローバルネットワークが日本国内で集めてモザンビークに継続的に送ってきた放置自転車が、武器との交換の対象になってきた。そこで、アーティストたちとのディスカッションの結果、民博におさめる作品は、自らの意思で武器を捨て、平穏な家族との時間を取り戻した人びとの生活を、武器と交換してえた自転車で乗る家族の姿で表現しようということになった。

作品は、フィエル・ドス・サントス、クリストヴァオ・カニャヴァート(ケスター)のふたりのアーティストとその助手たちの手で、二〇

一二年二月に三週間をかけて制作された。わたしたちはその作品を「いのちの輪だち」と名づけた。

内戦でモザンビークに残された銃は、数百万丁にのぼると推定されているが、これまでに回収できたのは百万丁前後。まだまだ大量の銃が残されている。また、地雷もまだ、地方には残されたままである。一方で、このプロジェクトをモデルにして、南スーダンやカンボジアでも、回収した武器を使って平和のミニユメントを作るプロジェクトが始まっている。モザンビークは、今、「銃を鋤に」プロジェクトを通じて、「平和の輸出国」になりつつある。



「いのちの輪だち」とその制作者、フィエル・ドス・サントス(右)とクリストヴァオ・カニャヴァート(ケスター)。2013年7月、民博にて

「武器の玉座」から「いのちの木」へ

クリストヴァア・スプリング 大英博物館キレイター

心の武装解除を

それは、アフリカについての驚きに満ちた物語だった。わたし自身にとって、その物語は、一年前に「武器の玉座」(Throne of Weapons)という作品を大英博物館のために収集したときから始まった。しかし、モザンビークの人びとにとって、その物語の発端は、植民地支配から独立するための長い闘いの時代にまでさかのぼる。独立は一九七五年に達成されるが、すぐさま外部の勢力によって「内戦」といわれる戦争状態が引き起こされてしまう。戦争は一九九二年に終結するが、戦後、七百万ともいわれる銃が、人びとのあいだに残された。デニス・セングラーネ司教はこの問題に立ち向かうため、一九九五年に「銃を鋏に」プロジェクトを立ち上げる。司教は、その際に次のように述べている。

「このプロジェクトの目的は、人びとの手から武装の解除を進めるだけでなく、人びとの心の武装解除を進めることです」

ていくことであった。

「いのちの木」は、クリストヴァア・カニャヴァアート(ケスター)、フィエル・ドス・サントス、ヒラリオ・ナトゥゲージャ、アデリノ・マテの四人のアーティストの手で制作された。このたび、民博のために「いのちの輪だち」(Cycle of Life)が制作された。制作にあたったのは、「いのちの木」にもかかわらずケスターとフィエルである。ふたつの作品は、いわば兄弟姉妹の関係にあるといえる。そしてそれは、この物語の担い手として、あらたにより多くの日本人人びとが加わっていくことを意味している。

(吉田憲司訳)



「いのちの木」
(Tree of Life)
クリストヴァア・カニャヴァアート(ケスター)、フィエル・ドス・サントス、ヒラリオ・ナトゥゲージャ、アデリノ・マテ
2004年制作 大英博物館所蔵 撮影・吉田憲司

破壊から創造へ

二〇〇二年、わたしはロンドンのチームズ川のほとりの小さなギャラリーに足を運んだ。そこには、動物の姿態や人びとのありふれた生活の姿をユーモアを交えて巧みに表現した彫刻が並んでいた。驚かされたのは、そのすべてが銃できてきていることだった。なかでも、一体の作品が際立っていた。全体がAK47でできた椅子であった。アーチ型に配置されたふたつの弾倉が背もたれになり、それを挟むように固定されたふたつの銃床の先端に肩ひもを通すためのふたつの丸い穴があいている。それが、わたしには、痛みをこらえて涙を流す一人の人物の顔に見えた。

わたしは、その作品を大英博物館で購入することにした。のちに「武器の玉座」とよばれることになる作品である。作品の背景を探るうち、それが「銃を鋏に」というプロジェクトによるものであることを知った。プロジェクトを通じて、アーティストたちは、銃という破壊の手段を創造的な彫刻作品に変身させていた。

素材になる銃は、モザンビークで製造されたものではない。アフリカで作られたものではない。その事実が、これらの作品に、この世界全体にかかわる特別の重みを与えている。

あらたな物語を担う

二〇〇三年、わたしはアーティストたちと、共同のプロジェクトに向けて議論を交わした。大英博物館のためにあらたな作品を制作してもらおうというのである。議論のなかから、「いのちの木」(Tree of Life)という作品のアイデアが生まれた。その制作を進めて大英博物館で公開すること、その制作過程をBBCのドキュメント映像に収めて電波に乗せること、そして「武器の玉座」を六〇か所以上の地で巡回展示し、より多くの人びとに直接触れてもらうこと。それを実現していく過程は、そのまま英国の市民もまた、この物語の一部に加わっ



「武器の玉座」(Throne of Weapons)
クリストヴァア・カニャヴァアート(ケスター)
2001年制作 大英博物館所蔵 写真提供・大英博物館
Photo: Courtesy of the Trustees of the British Museum

エコ&ピース・プロジェクト

——日本からモザンビークの平和構築を支える

竹内よし子

特定非営利活動法人えひめグローバルネットワーク代表

平和で持続可能な社会とは？

「あらゆる人びとが、人として平和な日々をおくることができる持続可能な社会を実現すること」。これは、えひめグローバルネットワーク(以下EGN)のビジョンだが、わたしが心砕いて日々取り組んでいることでもある。個人レベルや家族単位で平和の紡ぎ方を探り、団体・学校・地域など社会を構成するさまざまな規模で具現化していく道を探求していくことが、やがて地球一個分の平和につながると考えるからだ。

一九九九年、どのような国際協力活動が良いモデルとなるかをEGNで議論していたところ、偶然、目に留まったのが「銃を鋏に」プロジェクトだった。

EGNは武器との交換物資となる自転車等を二〇〇〇年から松山市や市民とともにモザンビークへ計七回送り、現在も継続して支援している。そして、二〇〇六年から武器ゼロと



モザンビークの平和を願って自転車をピカピカに磨き、メッセージを添える児童。EGNが取り組む「ESD」の実践授業において(新玉小学校)



総合的な学習の時間でモザンビークのアーティストと交流しながら、折紙やアルミホイルを使った児童の作品(東雲小学校)

ごみゼロを目指す「エコ&ピース」プロジェクトとして、自転車を通学支援にも活用し始めた。また、小規模だがマレンガーネという地域で、就学する児童が増えて足りなくなった教室を立てたり、縫製プロジェクトを立ち上げてフェアトレード商品の開発を試みたり、植林をおこなうなど、コミュニティ開発に取り組んでいる。

平和の語り部

人は生まれて必ず死ぬ運命を背負っているにもかかわらず、人しか使わない道具で人を殺すための武器を造ってきた。そして今も世界各地でこっそり、こっそり売出し、使い、捨て去っ

ている。わたしたちも「銃を鋳に」プロジェクトに出会わなかったら、地球にとっても、あらゆる生き物にとってもこれほど迷惑なゴミはないのに気づきもしなかっただろう。「武器アート」が語る平和への道のり。心の耳を傾けなければ聴こえてこない。

武器を造る社会のままで良いのか？ 愛媛に届いたアートはEGNとともに平和を学ぶ教材へと変わっていった。わたし自身、平和を語る語り部となり、平和を創る文化の土台となり、どんな社会を未来に望むのかを問い続けている。モザンビークは、武器アートとともに世界へ平和を輸出する国へと変わっていった。そんな思いが民博とのあらたなつながりを生み、「武器をアートに」展という協働の企画から平和の芽が吹き出す。日本中にこのメッセージを届けるのはわたしたちの役割だ。

ESDと平和の誓

わたしたちが学び、実行に移さなければ、いつまでも戦争は繰り返されるだろう。対話と非暴力で揺るぎない平和の文化を築いていくための鍵は「持続可能な開発のための教育(ESD: Education for Sustainable Development)」にあると考えている。自然環境との共生、社会的な公正の実現、経済発展と公平性を視野にいれた、新しい社会づくりの概念を「持続可能な開発」という。持続可能な社会の実現を目指して、わ

たしたち一人ひとりが、世界の人びとや将来世代、また環境との関係性のなかで生きていることを認識し、より良い社会づくりに参画するための力を育むための教育である。EGNは、二〇〇三年からESDに出会ってモザンビーク支援を継続できるようになった。今もESDがキーワードとなり、松山市民や世界中の人たちとつながり続けている。

「戦争は人の心のなかで生まれるものであるから、人の心のなかで平和の誓を築かなければならない(ユネスコ憲章)」。武器アートは、ありとあらゆる課題が複雑に絡む現代社会のなかで、平和への道を守る皆になるのではないか。



「いのちの輪だち」(Cycle of Life)
フィエル・ドス・サントス、クリスト
ヴァオ・カニャヴァート(ケスター)
2012年制作
国立民族学博物館所蔵
標本番号 H0274165

アートのちから

高橋 雅子

Wonder Art Production・ARTS for HOPE代表
アートプロデューサー

生きるためのアート

アートって何だろう？ その答えを探して二年前、アメリカのユニークなアート作品展を徳島県立近代美術館などで開催した。作品の制作年代は多岐に渡るが、作家は美術教育を受けたことがない高齢者や精神疾患者、路上生活者や受刑者、元奴隷の黒人、牧師など。生活困難な彼らが衣食住を整える以前に、土やトタン、板切れやゴミ箱のキャップバスを漁ってまで制作する理由は一体何なのか？ それは心の発露であり、人とのコミュニケーションであり、啓示、願い、救い、支え、誇りの探求とさまざまだが、彼らが生きるため、心のバランスを掴むために、アート制作が不可欠な行為なのだと感じた。

それ以後も、わたしたちはアートをもちと身近に感じてもらうために、さまざまなアートを紹介する展覧会の企画をおこない、子どもや地域社会、病院を対象としたアートプログラムもおこなっている。

ホスピタルアート

「アートのちから」を強く実感する現場のひとつが病院である。ロビーやプレイルームの壁をカラフルな絵で彩るだけで空間が温かく変し、患者さんや職員の表情も一気に和らぐ。患者さんたちとカラフルな布で自由にオブジェを作るHappy Doll Projectでは、無反応な認知症患者の瞳が覚醒し

て光が宿り、過去の記憶を話し始めたことがある。能動的に自分の手と感性を使う作業が彼の脳を刺激したのだ！ それまでに期待していた効果を上回る可能性に触れた瞬間だった。身体機能や病氣回復の可能性を感じる瞬間もある。脳梗塞のリハビリ患者が作品を完成させたい一心で、麻痺した指が動いたり、制作でリフレッシュした直後の癌患者が検査で良好な数値を示したり、弛緩して動けない子どもが絵具だらけで色と戯れるうち、しっかりと絵筆を握って描き始めたりと、奇跡とも思える数々の出来事。体中焼けただれた少年が、溶けて一塊になった手で作品を作り上げたときのガッツポーズとその目が放つ輝きからは、「アートのちから」が取り戻した「生きるちから」を感じた。

アートを通じた震災復興支援活動

東日本大震災後は、被災者の心の復興にアートが奮闘している。たった数時間のアートプログラムでも表情を無くした子どもたちが夢中になり、すっかりした顔に変わる。人生の最後に最悪が訪れたと、うつ状態になった高齢者も、自身が制作した作品に思わずにっこりする。原発事故で廃れた街にアートイベントで元気を運び、建物を明るい色彩で塗り替えるアトリノベーションで街を活性化していきたいと「アートのちから」で挑戦する日々である。アートを媒体に活動を重ね、たくさんの感動や奇跡に出会い、アートのほかりしれない可能性を感じている。



上：南相馬市雲雀ヶ原 震災復興応援イベント。Happy Flower Project
右：原発事故後、南相馬にできた屋内遊び場。利用者の希望でカラフルに彩り、周辺環境が劇的変化した

カンボジアの社会復興と伝統芸能

福岡 正太 民博文化資源研究センター

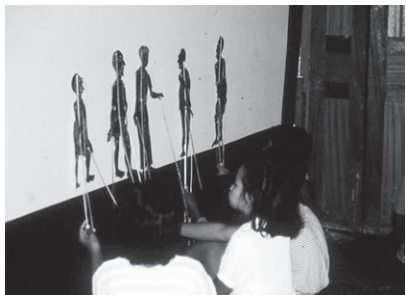
復興する伝統芸能

カンボジアでは、一九六〇年代後半以降、ベトナム戦争や冷戦時代の諸陣営の対立の影響を受け、戦火が絶えなかった。戦争により多くの命が失われただけでなく、ポル・ポトらが率いるクメール・ルージュ政権下（一九七五年～一九七九年）では、富裕層や知識人、僧、芸術家らが虐殺された。そして、伝統的な芸能の多くが壊滅的な打撃を受けた。一九九〇年代に入り、国際的な協力のもと、ようやく内戦に終止符が打たれ、社会の復興への努力が始まった。

スバエク・トイと子どもたち

一九九九年、わたしたちは伝統的な芸能を映像で記録するためにカンボジアを訪れた。その際、アンコールワットの玄関口であるシムリアップで、スバエク・トイとよばれる影絵芝居を教育に取り入れたクメール民俗芸能文化教育センターを訪問した。そこでは親を亡くしたり、貧困のため親元で暮らせない子どもたちが共同で生活しながら影絵芝居を学んでいた。

スバエク・トイは、ウシの革（スバエク）を素材とした小さな（トイ）人形を用いる影絵芝居だ。ユネスコの無形文化遺産として認められたスバエク・トムとよばれる影絵芝居に比べて、人形の大きさも上演の規模も小規模だが、



人形操作とセリフの練習



公演でHIVをテーマにしたお話を上演

それだけに自由度も高く、身近な物語を演じて庶民に親しまれている。

センターの先生方と話をしながら待っていると子どもたちが学校から帰ってきた。片足を失い松葉づえをついた子もいる。夕方になると、スバエク・トイの人形の操作やセリフ、伴奏音楽などの練習が始まった。彼らは、月二回ほど、トラックで村々を訪れて、公演もおこなっていた。演じるのは、センターの先生が作ったお話が中心で、HIVや人権をテーマにした啓蒙的な内容のものが多い。わたしたちが同行した公演には、近隣の村々からもたくさんの人が集まり、舞台をしつらえたお寺の境内は見物人でいっぱいになった。途中、電気系統のトラブルで上演が中断したが、そこで帰ってしまう人もなく、最後まで熱気に包まれた上演だった。

三つの目的

代表者のキィ・アムリン氏にお話をうかがったところ、センターは、文化の復興、子どもの教育、人々への啓蒙活動の三つを目的としているとのことだった。学校教育のなかで、本格的に伝統文化を学ぶのは限界がある。しかし、センターの子どもたちは、共同生活のなかで、人形作りから上演まですべてを身につけていく。彼らの上演を見て、伝統芸能に関心をもつ子がほかにも出てくることだろう。観光客の関心もひきやすく、経済的な自立にも結び付けることができる。こうした経験は、カンボジア社会を復興させていかなければならない子どもたちの自信や希望につながっていく。近年、センターのような組織で育った者が新しいNGOを立ち上げる例もあるようだ。失われた伝統芸能は、子どもたちを支えるものとして、再び根付きつつある。

日本版武器よさらば

木下直之 東京大学教授

GHQの刀狩り

日本社会には、少なくとも三度の大規模な「刀狩り」があったとされる。刀狩りということばに、一五八八年の豊臣秀吉によるそれを思い浮かべるひとは多いだろうが、内実は農民の武装解除に過ぎなかった。明治政府による武器没収はそれを上回り（一八七六年には士族の帯刀まで禁じた）、一四五年の占領軍による武器没収はさらに徹底したものであった。GHQは家宝として伝来してきた武器（その大半が刀剣）の所持さえも容赦しなかった。それらはもはや実用性を有していなかったが、没収され、旧陸軍の赤羽倉庫に集められた。こうして、自衛官や警官、猟友会員や一部暴力団員を除いて、日本国民は丸腰になり、社会から武器が消えた。ついでにいえば、戦争と武力の放棄までもが新しい憲法に盛り込まれた。

宝物としての刀剣は、すでに観賞用である。ゆえに武器ではない、という論理は、GHQにはなかなか通じなかった。そこで、編み出されたも

刀剣美術

の「美術刀剣」あるいは「刀剣美術」、すなわち刀剣はアートだとする論理だった。

一九四七年になってようやく、美術的価値を有する刀剣の返還をGHQが認め、刀剣審査委員会が組織され、接収刀剣数十万本のなかからおよそ五五〇〇本を救い出した。これを「赤羽刀」という。保管場所を赤羽倉庫から国立博物館（現在の東京国立博物館）へと移し、ほぼ同時に発足した日本美術刀剣保存協会は事務局を同館に置いた。こうして返還が始まったが、敗戦直後の混乱期での没収であったために、じつはほとんどの持ち主がわからなくなっていた。だから今もなお、「接収刀剣類の処理に関する法律」（一九九五年）にもとづいた返還事業が続いている。

注目すべきは、一九四七年五月三日の新憲法施行を機に（その第八八条を根拠に）、帝室博物館から国立博物館に変身した同館が最初に開いた展覧会が「刀剣美術特別展」（同年五月二十五日～六月二十五日）であることだ。国を挙げて、刀剣はアー

そして国宝に

一九五〇年に文化財保護法が制定されると、国立博物館は文化財保護委員会の附属機関となった。この時点でなお占領期である。刀剣を工芸品として認め、重要文化財、さらには国宝に指定して守ろうとする配慮が強く働いたに違いない。二〇二三年現在で国宝に指定された工芸品二五二点のうち、刀剣だけでおよそ一〇〇点を占めているのはこのためである。

もちろん、刀剣は「武器をアートに」突然姿を変えたわけではない。もともとアートであったということもできるし、相変わらず武器のままだったということもできる。東京国立博物館が一室を設けて美術品として展示している刀剣を、民博は民博で、そろそろ民族学の観点からコレクションに加えてもよいのではないか。数奇な歴史をたどってきた道具であることは間違いないのだから。

赤羽刀「水心子正秀・寛政元年銘刀」墨田区立すみだ郷土文化資料館所蔵



東京国立博物館の刀剣展示

似たモノ
さかし

似てるけどどこが違う
似てないようでどこか似てる
いろんな工夫や思いを映す
みんぱくの所蔵資料

武器の世界—お命頂戴つかまつる

民博 研究戦略センター

武器には、独特な存在感がある。そもそも仕事を機能的・効率的にこなすためにある道具のなかで、人間なり動物なりの生命を奪うためにつくられたのが武器。過剰な意味が孕まれるのは、そうしたかれらの出自に求められるのかもしれない。

まず思い浮かぶ武器として銃剣類があげられよう。権力・権威の象徴としてもなじみのあるこの道具、みんぱくの収蔵庫においても、地域横断的な共通性と、様式の多様性には目を見張るものがある。「昔前であれば『蛮族の刀』」としても形容されていたであろうモロッコやカメルーンのエキゾチックな刃の剣から⑥⑦、ブレスレットのようなスーダンの手首ナイフまである⑧。銃については、

そこまでのバリエーションはみられないが、アフガニスタンの銃の握りの部分の美しさ②、日本の火縄銃のさわり心地のよさ③、特筆すべきである。同じ飛び道具でも、空中に弧を描いて飛ぶオーストラリア・アボリジニの回帰型ブーメランには、人間の創意工夫のすばらしさが伺えるが、武器としてのブーメランは手元には戻ってこない棍棒①種である①。

うである④。あるいは目的があまりに突飛であるため、いまでは滑稽にまでみえる武器として、フィジーの棍棒があげられよう⑤。他国ではあまり例がないほど豊富な棍棒が産み出されたフィジーには、頭蓋骨を粉砕することなく、きれいに穴をあけるための突起があいた頭蓋骨は地炉での料理に適したのみならず、戦士に栄誉を与えたいという。人肉食が存在し、敵対部族の殺戮が地位の上昇と直結していた時代ならではの工夫であろう。いまでは人肉食用フォークと並んで、土産物として制作されたものが空港の売店でも売られている。



- ①ブーメラン、オーストラリア（民族：アボリジニ）、長さ77×厚さ2.3cm、H0123478
- ②鉄砲、アフガニスタン（民族：バシュトゥーン）、長さ59×厚さ5.6cm、H0000806
- ③火縄銃、日本、長さ98×厚さ3.9cm、H0097595
- ④槍、台湾（民族：パイワン）、幅4.6×長さ168cm、H0024368
- ⑤棍棒、フィジー、長さ80×厚さ14cm、H0136411
- ⑥短剣（下は鞘）、モロッコ（民族：ベルベル）、幅12×長さ42×厚さ2.5cm、H0169105
- ⑦刀（右は鞘）、カメルーン（民族：ピコム）、幅34×長さ59×厚さ5.5cm、H0089521
- ⑧手首ナイフ、スーダン（民族：ナリム）、直径23×厚さ1.9cm、H0114256

※寸法は計測時の最大値を示す。

日時 10月27日(日) 13時～16時
11月17日(日) 13時～16時30分
会場 本館展示場【ナビひろば】(定員15名)
応募締切 10月14日(月・祝)
※要事前申込、参加無料

特別展

「渋沢敬三記念事業
屋根裏部屋の博物館」Attic Museum」
日本銀行総裁、大蔵大臣を歴任した渋沢敬三はまた、邸内に私設博物館兼研究所を設立した民俗学者でもありました。本展では、渋沢敬三の経歴と民俗学研究を紹介します。
会期 12月3日(火)まで
会場 特別展示館

■関連イベント

◆公開シンポジウム
「渋沢敬三を語る―偉大なる学問の庇護者―」
井上潤(渋沢史料館館長)
内田幸彦(埼玉県立歴史と民俗の博物館 主任学芸員)

武田晴人(東京大学大学院教授)
宮本瑞夫(宮本記念財団理事長)
久保正敏(本館教授)

日時

10月13日(日)
13時30分～16時30分(13時開場)

会場 講堂(定員450名)
※申込不要、先着順、参加無料

※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

◆ワークショップ
「ファンタジックコレクション」

「集まれ!何でも収集家!」
本特別展示を通して、個人の分類や収集方法について見つめ直します。なんでも収集家大募集! 両日ともご参加ください。

企画展
「武器をアートの」
「モザンビークにおける平和構築」
モザンビークでは、内戦終結後に回収した武器でアートの作品を作りだすという事業が進んでいます。アートを通じて平和を築く営みを紹介しています。
会期 11月5日(火)まで
会場 企画展示場B

企画展
「台湾平埔族の歴史と文化」
平埔族の人びとが民族のアイデンティティを再構築するようを紹介しています。国立台湾歴史博物館との国際連携展示です。
会期 11月26日(火)まで
会場 企画展示場A

みんなくワールドシネマ
「人生、フクロボー!」
人工授精による新しい人間関係の発見を描いた映画を通して、新しい家族の在り方について考えていきます。
日時 11月10日(日)
13時30分～16時30分(13時開場)

会場 講堂(定員450名)
※申込不要、先着順、参加無料

※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

◆研究公演
「世界のニッポン、みんなくのニッポン」

夏々秋のみんなくフォーラム2013
「雄勝法印神楽みんなく公演」
豊かな三陸沿岸の文化を代表する雄勝法印神楽をご覧いただき、東日本大震災と東北地方へまなざしを向ける機会になればと思います。
日時 11月23日(土・祝)
13時30分～16時(13時開場)

会場 講堂(定員450名)
申込締切 10月31日(木) 必着
※要事前申込、参加無料
国際シンポジウム
「博物館コレクションの中のシベリア、極東諸民族の文化―収集、保存、展示方法の検討」
日時 10月13日(日) 9時30分～17時30分
14日(月・祝) 9時30分～12時30分
会場 本館第4セミナー室
使用言語 ロシア語、日本語
講師 佐々木史郎(本館教授)
※申込不要、参加無料

みんなく公開講演会

「ミヤンマー」
「刻んだ歴史 未来へのまなざし」
第一線の研究者が現地調査の経験を踏まえ、ミヤンマーの過去、現在、未来に迫ります。
日時 10月25日(金)
18時30分～20時40分(17時30分開場)
会場 東京・日経ホール(定員600名)
※要事前申込、参加無料

佐々木高明先生追悼シンポジウム
「日本文化のしくみ―その多様性を考える」
佐々木高明の学説の概要を紹介し、日本の民族学史の中に位置づけることも、どのように受容、批判され、学問的に展開されてきたかを検討します。
日時 11月9日(土) 13時～16時30分
会場 講堂(定員450名)
※申込不要、先着順、参加無料

●11月1日から7日は「教育・文化週間」です
教育・文化週間は教育や文化への関心と理解を深め、充実・新興を図ることを目的として設けられ、今年で55回目を迎えます。この機会に全国で開催される様々な行事に足を運んでみてはいかがでしょうか。
http://www.next.go.jp/a_menu/shougai/
kyoku-bunka/ (文部科学省ホームページ)

●展示場リニューアルのお知らせ
展示場リニューアル工事のため、朝鮮半島の文化・中国地域の文化・日本の文化(沖縄の文化)企画展示場Bが閉鎖されます。
期間 11月7日(木)～
2014年3月19日(水)

●展示場一部閉鎖のお知らせ
本館2階展示場の空調設備更新のため、左記の期間、展示場の一部閉鎖を行います。その間は観覧無料となります(ただし自然化園(有料区域)を通行される場合は、入園料が必要です)。ご理解とご協力をお願い申し上げます。
1. 12月5日(木)～2014年1月22日(水)
音楽の一部、言語、南アジア、東南アジア、中央・北アジア、アイヌの文化、日本の文化、ナビひろば、休憩所が閉鎖されます。
2. 2014年1月23日(木)～2月19日(水)
オセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、音楽の一部が閉鎖されます。

※お詫びと訂正
9月号12ページ、11月3日開催の研究公演「共振する大地のリズム」の記載内容に誤りがございました。お詫び申し上げます。
訂正前:先着450名 訂正後:定員450名

訃報 大給近達名誉教授
本館名誉教授の大給近達先生(八二歳)が八月二日に逝去されました。一九七四年のみんなく創設とともに第四研究部教授に就任された先生は、大給松平家当主の気品と風格を漂わせつつ、情報システム整備の推進役として、また、初代展示委員長として、みんなくの基盤完成に尽力されました。ここに深く哀悼の意を表する次第です。

みんなくセミナー

会場 国立民族学博物館 講堂
時間 13時30分～15時(13時開場)
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です)

第425回 10月19日(土)

「企画展関連」
心の武装解除―モザンビーク「武器をアートの」プロジェクトを考える

講師 吉田憲司(国立民族学博物館教授)



みんなく収集した作品(いのあるたち)の制作(2012年10月)

アフリカのモザンビークでは、内戦終結後も大量の武器が民間に残されました。その武器を農民や自転車と交換して回収し、武装解除をはかるとともに、回収した武器を素材にアートの作品を生み出して、平和を人々の心に定着させようというプロジェクトが進められています。そのプロジェクト「銃を銃に」の意義を考えます。

第426回 11月16日(土)

「企画展関連」

台湾平埔族の歴史と文化

講師 野林厚志(国立民族学博物館教授)



機を織るクワラン族の女性(19世紀末頃)

台湾において、早くから漢族の影響を強く受け、慣習言語、物質文化が大きく変化していった平埔族の人々は近年、歴史史料や博物館資料を手がかりに自分たちの歴史を見つめなおし、民族アイデンティティを再興させています。今回のセミナーでは平埔族の歴史と文化を紹介し、エスニアイが再生される過程を考えます。

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
定員 96名(当日先着順、会員登録必須)

第425回 11月2日(土) 14時～15時
くすりの民族学
講師 小山修三(千里文化財団理事長)

現在の日本は医学が発達し、長生きで健康的な生活が送れるようになりました。これは西洋医学のおかげですが、一方で高額な医療費、効き目の強い薬が用いられるなどの弊害も抱えています。そうした中で、日本に限らず世界各地の土着的な医療が見直されつつあります。日本ではいまでも伝統的な売薬や民間薬が活用されています。日本人の薬の使用の歴史を考えながら、薬草についてお話しします。

東京講演会

会場 モンベル品川店2Fサロン
定員 60名(要事前申込)
第107回 12月21日(土) 14時～15時30分
「テオテックよ」

講師 三尾稔(国立民族学博物館准教授)

第83回民族学研修の旅

ベトナム西北部 少数民族の世界へ
11月21日(木)～29日(金) 9日間
訪問先:ベトナム(ハノイ、マイチャウ、ソンラー、サバ)少数民族の村の訪問や市場めぐり、高床式の民家での宿泊も予定しています。
※詳細は上記友の会までお尋ねください。

親子で体験

泥つてすごい!おもしろい!―すまいと土を考える
10月12日(土)、13日(日)

会場 国立民族学博物館 特別展示館地下休憩所
土壁ぬりを体験するほか、ミニかまと作りなどもおこなえます。参加費、プログラム内容などの詳細は上記友の会までお尋ねください。

国立民族学博物館
ミュージアム・ショップ

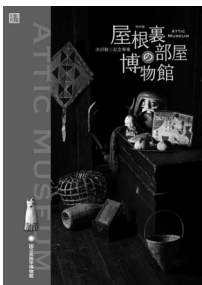
電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

みんなくは、屋根裏部屋からはじまりました。
特別展の解説書

現在開催中の特別展「屋根裏部屋の博物館」の解説書をご紹介します。屋根裏部屋の博物館とは、渋沢敬三が創設したアチックミュージゼアムのこと。アチックミュージゼアムのコレクションは、民博の収蔵資料の母体となったものです。本特別展は、いわば民博のご先祖のひとり、渋沢敬三の生涯をたどり、アチックミュージゼアムの歴史をその貴重なコレクションとともに展覧するものです。

全216ページの本書は、特別展のコーナーごとの解説を軸に、渋沢敬三とアチックミュージゼアムにまつわるコラムをはじめ構成で読み応え充分。巻末には渋沢敬三の年譜と展示資料の出品目録のほか、参考文献も付いています。民博ファン必読の一冊です。



『渋沢敬三記念事業
屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』
価格:2,762円(本体価格)+税
友の会会員価格:2,486円(本体価格)+税
編集発行:国立民族学博物館
デザイン:松尾エリ(popworks)、所雅子(きのこ)
制作:株式会社淡交社

大韓民国歴史博物館

韓国の首都ソウルの中心にある「大韓民国歴史博物館」を訪れた。案内してくれたのは、創設からこの博物館にたずさわってきた金時徳展示課長である。韓国国立民俗博物館の学芸士であった一九九九年、ちょうどみんぱくが「朝鮮半島の文化」展示のリニューアルをしていたころ、外国人研究員として本館に一年間滞在していた経験もある。



——二〇二二年二月二六日に開館したとうかがいましたが、創設の経緯を教えてください。

二〇〇八年八月一日に李明博大統領が大韓民国の光復六三周年および建国六〇周年慶祝辞で「苦難と逆境のなかで発展した自慢すべき奇跡の歴史を記録し、後世に伝承し、国民の矜持の高揚および国民統合として国家の未来発展の原動力を確保するため『大韓民国歴史博物館』を建設しよう」と公表しました。そして、翌年の五月四日に企画課と建立課のふたつの課からなる、わたしを含めた二二名の大韓民国歴史博物館建立推進団が発足し、本格的な準備を進めました。

——景福宮の光化門の前という、ソウルの中心地にありますね。

以前は文化体育観光庁があった場所、隣にはアメリカ大使館があります。博物館の規模は敷地六四四五平方メートル、建築総面積二万七三四平方メートルで、地上八階の建物に常設展示室(三〇九〇平方メートル)とふたつの企画展示室、収蔵庫、セミナー室、カフェ、ショップ、屋上庭園などをもっています。

——常設の展示場は、一階からエスカレーターでのぼって三階に行き、それから五階までと、垂直型の展示は大阪の歴史博物館と似ていますね。

玄関ホールは一階と二階の吹き抜けになっており、一階にはふたつの企画展示室があります。ひとつは「大韓民国の再発見」と題し、重要な歴史的瞬間と政治・経済・社会・文化など多様な分野を、最先端ディスプレイ技術をとおして、見て、聞いて、感じる空間にしています。もうひとつの「わたしたちの歴史宝物倉庫」は、資料を直接触り(Hands-on)、発見し(Finds-on)、理解する(Minds-on)

という経験を基にして、子どもたちの視線から現代史を学習する場です。

三階の第一展示室の主題は「大韓民国の胎動」です。自主的近代国家の夢と挫折、大韓民国臨時政府と独立運動、一九四五年の八・二五光復(植民地支配からの解放)を展示しています。つまり、一九四八年の大韓民国の成立よりやや遡って、英語名で National Museum of Korean Contemporary History とあるように、日朝修好条規(江華条約)が結ばれた一八七六年以降の「現代史」を展示しています。そして、四階の第二展示室が「大韓民国の基礎確立」です。大韓民国政府樹立、六・二五戦争(朝鮮戦争)と戦後の復旧、戦後近代国家の土台の構築を展示しています。

五階の第三展示室は「大韓民国の成長と発展」です。経済開発と産業化、変貌する都市と農村、市民社会の成長と民主主義を展示しています。そして、同じく五階の第四展示室は「大韓民国の先進化世界への跳躍」という主題で、スポーツ、文化などをとおして世界に進出し、経済先進国に向かう姿を展示し、総合映像室では大韓民国の未来を映し出しています。

——資料はどのように収集したのですか？

展示資料の収集は、韓国国立民俗博物館での経験を生かして、二〇一〇年六月三日からキャンペーンをして二万余点以上の資料の寄贈を受け、九月一日から公開購入と競売購入で約三万余点の資料を確保しました。現在の二二〇点の展示品のうち外部からの借用品や複製品は、わずかに二〇〇余点にすぎません。——展示場をまわってみると、時代に色使いを変えたり、さまざまなIT技術が導入されていますね。インターネットデザインを借用して、暗い時代と希望に満ちた時代によって空間の色彩を変えたり、歴史をたんに事実中心に羅列せずに、ストーリーを創り出して観覧客が退屈しないように心がけました。また、技術的には、デジタルには長所が多いのですが、アナログ世代には不便ですし、展示内容が不足しているという批判を受けもするので、デジタル技術を利用しアナログの感性を極大化させるデジログ(Di-Logue)技法を借用しました。

——現代史を展示するということは、むずかしいですね。

保守政権の時期に建立したので、公平性と客観性に欠けるという進歩陣営の批判の対象になりました。また開館してからは、「ドイツ歴史の家」が二年という充分な討議をかけて開館したことと比較し、四年間では拙速だったという批判もあります。しかし、これも互いの設立経緯を比較してみれば、批判のための批判だと多くの博物館関係者は話しています。また、現代史を対象にしているため、これまで収集の対象とならなかった工産品、今まさに生産された最先端の製品も重要な収集対象になります。その意味では、新しい博物館の姿をみせていけると思います。

朝倉敏夫

民博文化資源研究センター



金時徳さん



1階の「わたしたちの歴史宝物倉庫」展示



第一展示室



来館記念の電子芳名録



建物の全景

「買ひてもらひつ」「から」「売れる」「フェアトレードへ

二〇一二年一月一四日、阪急百貨店つめた本店リニューアルの目玉のひとつであるSOUQというフロアー（二〇階）にフェアトレードのセレクトショップLOVE&SENSEがオープンした。百貨店の本店にフェアトレードショップが出店したのはおそらく日本で初めてのことではないか。

フェアトレードのセレクトショップ

わたしがフェアトレードという概念に出会ったのは九〇年代の後半にマーケティングの会社を経営していたときである。当時はデフレが急速に進み、クライアントの要求はいかに安く商品を仕入れて販売するかが主流になりつつあった。商品開発にも携わるなか、一〇〇円で販売されている商品の多くが、生産者へ正当な報酬を支払ったならば本当はそんなに安く売れないことは明らかであり、グローバル化によって効率化が進み、さらに安さ重視の世のなかになっていくことに心を痛めていたころであった。ものづくりの過程で、誰かにしわ寄せがいつている可能性が強かったからである。

インドでの衝撃

公正な貿易といわれるフェアトレードの生産現場に行き自分の目で見てみたいとおもい、二〇〇〇年にインドをスタディツアーで訪ねた。海外旅行の経

験は多くあったが、インドの奥地は衝撃的なものばかりであった。上下水道が整備されていない地域に化学染料の汚泥が野積みになっていた。泥で作った「かまくら」のような家に住む家族、野戦病院のように、屋外のテントに入院患者が寝かされている現実、カースト制が生む矛盾、女性の地位の低さ、圧倒的な貧困に驚愕した。

そのなかでイギリスの牧師が運営している集落があった。未亡人や離婚を余儀なくされた女性、またDVや他の理由で家を出なければいけなかった女性たちが、自分の子どもと、そして孤児たちを引き取って一緒に暮らしていた。そこには小さな手仕事があり、彼女たちは、ささやかながらも仕事を糧に生き生きと生活していた。圧倒的な貧困のなかに、一縷の光を見たような気がした。

自分自身もっているマーケティングの力を、このような人びとに役立てたい、いつの日かフェアトレードにかかわりたいと強く思った。インドで出取り上げていただいた。

会ったフェアトレード商品を扱っている国際NGOオックスファム（本部はイギリス）の日本にいる関係者を訪ねた。二〇〇三年、オックスファムジャパンの設立にかわり、一二年まで理事を務めた。しかし、当時まだ資本が整っていないオックスファムジャパンでフェアトレードをすることはかなわず、自らが立ち上げることを決意し、〇六年に株式会社福市を設立した。

貧困問題への「かわいい」アプローチ

会社設立にあたって考えたのは、自分自身でフェアトレード事業を立ち上げる意義である。当時フェアトレードの国内認知度は推定約三パーセント。市民団体をはじめ多くの先輩たちが国際貢献に関心がある人などを中心にマーケットを生み出し活躍されていた。しかし、同じマーケットに向けて事業をおこなってもフェアトレードを広めることにはつながらない。ならば「フェアトレードに関心がない層」もしくは「世界の貧困問題を知る機会がなかった層」にアプローチをおこない、広めていくことこそ自らのミッションであると考えた。同時に流通業界で決裁権をもっている人たちに共感してもらい、いつの日か商業施設に必ずフェアトレードショップがあるような社会にしたいと思ひ会社をスタートさせた。そしてそのキーワードは「かわいい」であると考えた。幸いにも最初のショップは、おしゃれな名古屋のロフトのなかであった。什器をしつらえ、商品の展示についてもかなりの工夫を凝らしたが、認知度三パーセントの状況下では、売り上げがほとんどない日々が続いた。そこで、インターネットを活用し、

同じ商品でも商品の背景（フェアトレード）を伝えることでの購買意識の変化を調査し、フェアトレードを知らない人でも八〇パーセント以上の人が共感してくれるというデータをえた。またメディアにも取り上げていただいた。終了後に大きく見直しをおこない「独自性」と「かわいい」に注力して新商品を開発、マーケティング調査の結果とメディアの掲載実績をもって、ご縁のあった表参道ヒルズにプレゼンテーションをおこなった。〇八年に期間限定ショップを展開した。そこから高島屋・伊勢丹・丸井・三越等、名だたる百貨店でLOVE&SENSEを展開していった。こだわったのは成果を出すことだ。売り上げ、集客、話題性（メディアの注目度）など、フェアトレードのような消費スタイルに関心が集まれば、多くの流通業が動き出し、結果、フェアトレードがより広がるの考えからだ。容易にできることではないが、品揃えや店頭での見せ方などを工夫することで、まだまだ改善の余地が大きい。そんな実績が実り、阪急百貨店の常設店舗が生まれた。

お店ができたことはわたしたちにとってスタート地点である。より多くの人たちにフェアトレードの考えをつたえること、そして魅力的な商品を、生産地に過剰に負荷をかけることなく作ってもらうこと、このふたつが成り立たなければわたしたちの目指す世界には届かない。社名の福市は、市場（お店など）という場所が、作る人と買う人をつないでハッピーになるとい思いをもつてつけた。社名に恥じることなく、これからもチャレンジをおこなっていきたい。



LOVE&SENSE店頭のかわいいディスプレイ



リサイクルプラトップでできた
ブラジル製のバッグ



インドのラクナウ市で
作られた美しい刺繍



インドで訪れた村で、たくさん子どもたちにかこまれる筆者



村で手刺繍をおこなう女性。家でできる貴重な仕事（インド）



織物の染のための作業（カンボジア）

太陽系外惑星の観測

——ハワイ、マウナケア山

眞山 聡まやま さとし
総合研究大学院大学助教

第二の地球をさがす

宇宙が誕生したのは三十七億年前といわれているが、これを一般的な一年に例えてみよう。宇宙の誕生を元旦、現在を二月三日二四時〇〇分とする、太陽系と地球は八月末〜九月初旬に誕生し、原始生命が九月中旬に誕生した。人類は二月三日、つまり大晦日の夜二二時過ぎまで出現しないことになる。

太陽系のように生命を宿す惑星系が他にも存在するのかわかっているか？ 現代天文学は、これらの根源的な疑問に科学的に迫ろうとしている。一九九五年に太陽系外惑星（太陽以外の恒星のまわりの惑星）の存在が観測的に実証されたことによって、この分野の研究は飛躍的に加速した。これを機に現在まで一八年で千を超える太陽系外惑星が検出された。地球に迫る質量をもつ惑星も少しずつ発見されつつあり、今後はそのような地球型惑星の存在

を調べる研究が盛んになることが予想される。太陽系の惑星の大気組成を調べてみると、地球だけに見られる特徴は、酸素と水である。地球に存在する酸素は、おもにバクテリアの光合成によって作られたものだ。よって、あらたに発見される惑星の大気を調べ、そこに酸素が含まれていれば、その酸素を作り出した生命が存在している可能性がある。

惑星の誕生

惑星がどのように形成されるかは、いまだよくわかっていない。筆者は赤外線天文学を専門とし、太陽系外惑星検出観測をおこなうとともに、惑星の形成についても研究している。地球や木星など、太陽系惑星がどのように誕生したかに迫るためには、太陽が生まれた四六億年前に遡らねばならない。当時、原始太陽の周囲にはガスや塵が円盤状に存在していた。このなかでは塵の集積によって

微惑星ができ、さらに微惑星同士が合体・成長したり、ガスを捕らえたりすることで地球や木星のような惑星が生まれたと考えられている。原始惑星系円盤とよばれる惑星誕生の現場は重要な観測対象である。よって、他の太陽に似た恒星の周囲に存在する原始惑星系円盤の観測によって、生まれたばかりの惑星を直接撮像することが可能であり、惑星がいつ、どこで、どのように形成するかという未解明の謎に迫ることが出来る。

雲の上の観測所

その舞台となるのが、日本がハワイに建設した「すばる望遠鏡」。一枚鏡の望遠鏡としては世界最大規模を誇る。すばる望遠鏡を運用する国立天文台ハワイ観測所では、惑星誕生の謎を解き明かすために連日観測が続けられており、筆者は過去に三年半ここに滞在した。日本に戻った現在でも、日本・アメリカ・フランス・カナダ・ドイツ・台

湾の天文学者らと、太陽系の外にある惑星を探すすばる望遠鏡プロジェクトの一員としてかわわっている。観測所は、州都ホノルルのあるオアフ島から五〇〇マイル程南東にあるハワイ島に拠点を構えている。島の東に人口四万人程の町が広がっており、そこに一〇〇人程度のスタッフが常駐している。さらに四輪駆動車を四五マイル、二時間半ほど走らせ、雲を突き抜けると、すばる望遠鏡に到着する。ここマウナケア天文管区は、チリ・カナリア諸島と並び、天文観測にもっとも適した気象条件をもつ世界三大天文観測地のひとつであるため、世界各国から望遠鏡と天文学者が集まっている。同分野の競争相手の論文著者住所を見ると、隣の

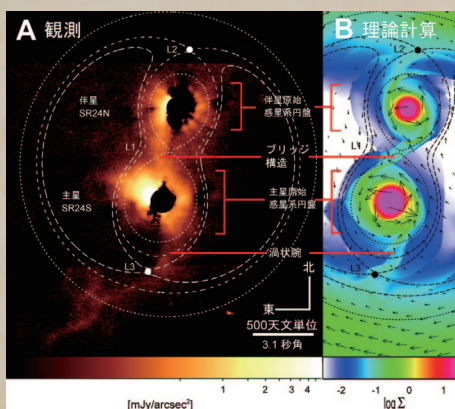
観測所にいることも頻繁にあり、緊張しながら訪問した研究室で、彼らはとても気さくに迎えてくれる。すばる望遠鏡を含めて各国観測所がグローバルであると同時に、温かいもてなしのころをもっているのは、ハワイ独自のローカルな文化とそこに住む人びとに起因していたのだろう。マウナケア山では現在、二〇二〇年完成に向けて口径三〇メートル望遠鏡の建設計画が進行中だ。より強力な望遠鏡によって、我々の知る世界観はますます広がっていく。地球外に生命が発見されれば、人類の宇宙における立ち位置や生命の普遍性に関する我々の価値観も大きく変わっていくことになるであろう。



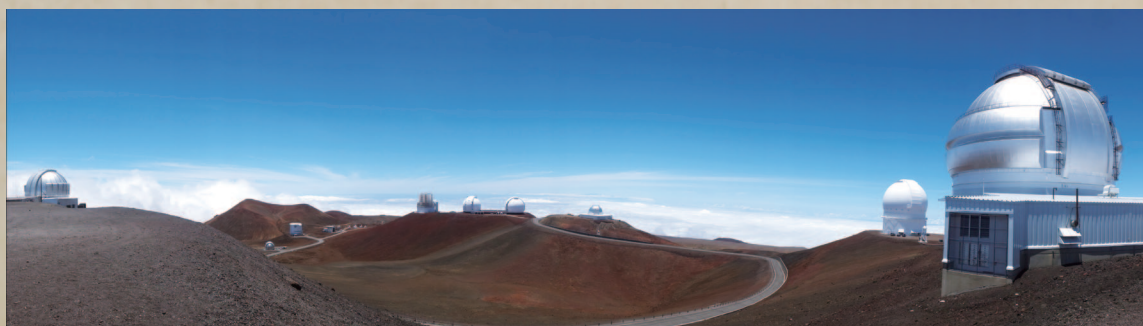
マウナケア天文管区のイベントで集まる各国の天文学者。(写真提供・JTU)



国立天文台ハワイ観測所スタッフ。(写真提供・国立天文台)



左:SR24。星を取り巻く原始惑星系構造のすばる望遠鏡観測画像。本研究によって、隣の惑星系と惑星材料のやり取りをしながら成長する惑星系の存在を初めて明らかにした。右:SR24のコンピュータシミュレーション再現図。(Mayama et al. 2010, Science)



ハワイマウナケア天文管区。世界最高峰の望遠鏡が並ぶ。(写真提供・国立天文台)

イスラーム復興ということばは、現代社会においてイスラームに則した生き方を求める運動を広く指している。この運動は世界各地でみられ、生活のなかで礼拝や断食などを重んじる個人々の活動から、モスクを建設しイスラーム教育を促進するといった社会的活動、さらにイスラーム法にもとづく国家の実現を求める政治的活動まで、多様なかたちをとる。

これらの活動の背景には、イスラームにのっとった社会が充分に実現されていないという、イスラーム教徒自身による批判的な認識がある。つまり、急激な近代化にもなつて政治と宗教が分離され、かつてのようにイスラーム法を遵守する国家や社会は失われてしまった場合が多い。このため、アッラーのことはであるクルアーン（コーラン）や、預言者ムハンマドの慣行などの信仰の原点に立ち帰らなければならない、と考えられている。

このように書くと、イスラーム復興とは前近代的な社会を実現させようとする、時代錯誤な運動のように思われるかもしれない。しかし実際には、近代化の波をいったん経験した人びとが、近代化とイスラームを結合することであらたな社会を目指す動きである。一九七〇年代のイラン・イスラーム革命や、一九九〇年代の旧ソ連からの中央アジア諸国独立ともなうイスラームへの関心の高まり、さらに昨今の中東情勢など、イスラーム復興の潮流をふまえて理解すべき事象は多い。

イスラーム復興

Islamic Revival

藤本 透子 民博 民族文化研究部

知っておきたい

人間学の
キーワード

それでは、マスコミでしばしば用いられる「イスラーム原理主義」や「イスラーム過激派」と、イスラーム復興とはどのような関係にあるのだろうか。イスラーム復興は日常生活のなかでイスラームの教えを実現しようとする人びとの幅広い運動を含むが、「イスラーム原理主義」は「イスラーム過激派」とともに、イスラーム復興のごく一部である急進的で武装闘争も辞さないような組織をさして用いられている。イスラーム

がテロとの結びつきで話題になりがちな状況は、穏やかにイスラームの教えを実現しようとする人びとの姿を見えにくくし、イスラーム教徒全般が脅威だという誤った認識を生みやすい。実際には、大部分のイスラーム教徒は急進的な活動に批判的だ。武装闘争をおこなう組織が形成される背景には、グローバルな経済や政治のゆがみが影響していることに、あらためて眼を向ける必要がある。

世界のイスラーム教徒の人口は約一〇億人にのぼっており、日本でもイスラーム教徒は遠い存在ではなくなりつつある。中東の宗教というイメージに反して、じつはもつともイスラーム教徒が多く居住するのはインドネシア、バングラデシュ、インド、パキスタンなどアジアの国々である。日本にもこれらの国々から移住したイスラーム教徒が多く暮らしている。多民族化するわたしたち自身の社会をより深く捉えなおすひとつのきっかけとしても、イスラーム復興は重要な概念といえよう。

「野球大国」ドミニカの秘密

窪田 暁 くぼ た さとる 民博 外来研究員・京都文教大学実習職員

「ハングリー精神」というイメージ

今年の三月に開催された第三回ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)は、ドミニカ共和国(以下、ドミニカ)の初優勝で幕を閉じた。予選から決勝までを全勝で飾る完全優勝のおまけつきで、あらためて「野球大国」の実力を世界中の野球ファンに

みせつけることになった。WBCの開催中、いくつかのマスコミがドミニカを特集していたが、一様にその強さの秘密にせまるといったものだった。そこでは、ドミニカの子どもたちにとって、貧困から抜け出す唯一の手段が大リーガーになることであり、そのような環境のなかで育まれた「ハングリー精神」が、多くの大リーガーを生み出す理由であると説明されていた。たしかに、選手の大半は貧困家庭の出身で、学校を卒業しても安定した仕事につける保証などなく、野球で一攫千金の夢をかなえたいと願う少年は少なくない。だが、大リーガーの数だけでは計れない深遠さがドミニカ野球にはある。

野球をとりまく人びと

ドミニカには大リーグ三〇球団が選手発掘・養成施設(アカデミー)を設けている。各球団は国内全土にスカウトを派遣し、優秀な野球少年がいればトライアウトを

うけさせる。合格した少年に支払われる契約金は、平均で二七〇万円。貧困層の月収が二万円にも満たないことから、大リーガーではなく、アカデミー契約が少年たちの現実的な目標となる。彼らを指導するのがブスコン(探す人)とよばれるコーチ。毎日、無償で練習につきあう



路上で野球をする子どもたち(ドミニカ共和国パニ市)

自宅に住まわせ、食事やプロテインを与える。母親は息子が野球で稼ぐことを期待し、父親は野球以外で稼ぐことの難しさを身をもって教える。近所の大人は大リーガーにたかり、昼間から野球賭博場にいりびたる。野球少年はそんな大人たちの背中を見て育つのだ。一方、大リーガーになれなかった元アカデミー選手は、移民としてアメリカに渡る傾向にある。契約金で購入した家の所有証明書のおかげでアメリカのビザが取得しやすく、車や家具を担保にすれば渡航費用を工面できるからだ。アカデミーの契約金を元手に第二の人生を切りひらき、いまでは故郷の家族を支えているのである。

大リーガーはもとより、アカデミーをめざす少年と彼らを支える大人たちがいる。そこには野球をとりまくさまざまなアクターの「したたかな」生きかたが見え隠れする。それらが幾重にも層をなし、野球大国の底辺を彩っている。それがドミニカだ。

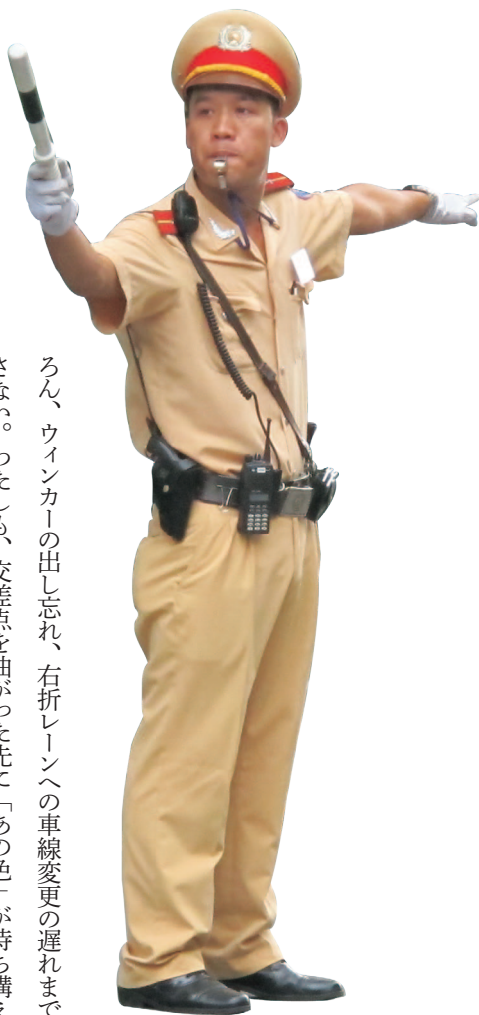


サッカー日本代表が二〇一四年ワールドカップ出場を決めた夜、サポーターの熱気で沸きかえる渋谷交差点に、巧みな話術で交通整理する機動隊員があらわれ、「DJポリス」として話題になった。場所は転じてベトナム、ハノイ。人、バイク、車、露店でこた返している街の喧噪のなかで、秩序の番人たちの「色」は、どのように機能しているのだろうか。

ハノイの街の秩序をつくる「色」

寺戸 宏嗣 てらと ひろつぐ
在ベトナム日本国大使館専門調査員

日本の街で警官にどれだけ出会えるだろうか？ベトナム・ハノイの街を散策すれば、すぐにかならず緑やらオレンジやらの警官の制服姿が目にとまるはずだ。二輪車であふれ、露店がさかんなハノイでは、警官自身による秩序維持が重要らしい。あるいは、街の喧噪がかれらの大事な商売相手なのかもしれない。わたしたち喧噪の一員にとって、その制服は日常的でありながら、しかも目を引く。



交通警察官。その色は妙に目立つ

妙に明るい

「交差点の真んかに行けばいいよな？」

警官の制服を撮りたいと申し出ると、こう言っただけはすたすたとバイクの群れのなかに陣取った。そして、制服をまとった身体、手にした白い警棒、口にした笛を駆使して信号機を補助し、通勤ラッシュ時の交通を整理した。違反取締りもかれらの主要任務だ。信号無視やヘルメット不着用はもちろんで、この妙に明るい色のおかげで、この警官たち本人にもちよつとした気安さと気紛れが許されはしないだろうか。路上駐車などの取り締まり現場で、警官と市民があたかも談笑するかのように交渉しているのを見ると、そんな勝手な想像にも一理ある気がするのだ。

闇夜に溶け込む色

ハノイの夜は早い。二十一時ごろまでは街の公園に多くの家族連れが集っているが、一時間後にはうってかわって人通りが少なくなる。食堂やカフェや電器屋の多くも閉店し、音と灯りが一気に乏しくなる。闇が濃くなると、機動警察の出番となる。かれらは四人一組、二台のバイクか一台のクルマで移動するのが基本形だ。夜の不審者にすつと近寄り声をかけるのが仕事。本当に危ない連中かもしれないから、単独行動はリスクキーだし、装備も万全にしておかなければならない。制服の色も、妙に際立つたりはせず、闇に溶け込む。



機動警察。四人一組で、それぞれに装備が異なる



婦人警官は朝のラッシュ時以外にはあまり見かけない



「ふつうの」警官。事件現場用と事務所用とは帽子、上着や靴、装備などに違いがある。写真は現場用



靴下も制服のうち

地区の巡回者

夕刻、ミニホテルのロビーでくつろいでいたときのこと。突然ホテルのマネージャーが受付の女性従業員から用意されていた封筒を受け取り、急ぎ足で表に出た。ホテル正面の路上には、バイクにまたがった中年男性。マネージャーはひとことふたこと挨拶し、封筒を手渡して戻ってきた。月一程度、こうやって地区の巡回にくるらしい。制服？もちろん着ていなかった。何者だったのか。

外国人は不審な行動をしがちだ。わたしも声をかけられたことがある。ほろ酔いで歩いていたら、かれらが近づいてきたことにまったく気づいていなかった。以来、わたしはその色を真つ黒だと信じていたが、昼間に見てみると完璧な黒ではなくオリーブ色だった。警察学校を出たばかりに見える若者でさえ、オリーブ色を身にまとうと表情が引き締まった。

ろん、ウインカーの出し忘れ、右折レーンへの車線変更の遅れまでも、見逃さない。わたしも、交差点を曲がった先に「あの色」が待ち構えていたりすると、ドキッとす。交通警官だけの、オレンジっぽい制服の色だ。その色が目につくのは、日頃バイクを運転しながら自然と身につけた「リスク」回避意識のためばかりではない。妙に明るい色なのである。交通警官のオレンジ色だけでなく、「ふつうの」警官の緑色もそうだ。派手じゃないけれど、独特の存在感がある。生地はどこにでもありそうな布地だが、公安省お抱えの制服工場で何か特殊な染色がおこなわれているのかもしれない。どうだろう。きっとわたしたちだけの勝手な印象かもしれないが、黒や紺、あるいは白の制服に比べて少々厳格さや力強さに欠ける気がする。警官に

10月

みんなくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

■ 14時30分から15時30分

■ 展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。どんでん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

6日

(日曜日)

話者：三尾稔（国立民族学博物館 准教授）
話題：インドの婚礼のいま
会場：本館展示場（ナビひろば）

13日

(日曜日)

話者：野林厚志（国立民族学博物館 教授）
話題：【企画展関連】台湾民族事情
会場：本館展示場（ナビひろば）

20日

(日曜日)

話者：福岡正太（国立民族学博物館 准教授）
話題：東南アジアのゴング文化
会場：本館展示場（ナビひろば）

27日

(日曜日)

話者：金田純平（国立民族学博物館 機関研究員）
話題：笑い話を分析する一関西の女性の面白さとは
会場：本館展示場（ナビひろば）

1年間みんなくに何度でも入館できる 「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいあります。

- 特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
 - ◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
 - ◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。
- 詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

編集後記

人を殺すための道具が、これほどお茶目に変身できるのか。

出口の見えない戦いが続いている地域が世界にはまだまだあるが、企画展を見て一抹の希望を感じた。憎しみを解体し、命を溶接する工程に関わられた人びとに心から敬意を表したい。武器をアートにするのも、アートを武器に病や災いと闘うのも、結局、遊び心が肝心なのだと思う。

8月3日に亡くなられた本館の近藤雅樹教授も、遊び心に共鳴される方であった。近藤氏がかかれた文章やイラストには、しゃれっけがにじみ出ている。みんなくでの最後の大事な仕事であった特別展「屋根裏部屋の博物館」の開幕を目前にして、無念の逝去。実行委員やスタッフは氏の遺志を継いで、開幕までの限られた時間と残された作業に果敢に立ち向かい、今まさに弔い合戦を繰り広げている。私も編集部とともに、追悼の意をこめて、次号の渋沢敬三特集を近藤氏に喜んでいただけそうな、味わいのある号に仕上げたい。(山中由里子)

- 表紙 「ギターを弾く男」(The Guitarist) 標本番号:H0274168
クリストヴァオ・カニャヴァート(ケスター) 2012年制作
国立民族学博物館所蔵、地域:モザンビーク、マップ

次号の予告

特集

渋沢敬三と屋根裏部屋の仲間たち

月刊みんなく 2013年10月号

第37巻第10号通巻第433号 2013年10月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 八杉佳穂
編集委員 山中由里子(編集長) 櫻永真佐夫 久保正敏
庄司博史 菅瀬晶子 丹羽典生 野林厚志

編集アドバイザー 山内直樹
デザイン 宮谷一欒
制作・協力 一般財団法人千里文化財団
印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分。
- 自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんなくフェイスブック

<http://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

